

TVキャスター
草野 仁 さん

HITOSHI
KUSANO

「くさの・ひとし」1944年満州生まれ、長崎県島原市育ち。1967年に東京大学を卒業後、NHKに入局。1977年に東京アナウンス室へ異動後、主にスポーツキャスターとしてモントリオールオリンピックやレークプラシッドオリンピックをはじめ、さまざまなスポーツの実況中継を担当。1985年に退職してからは、フリーのTVキャスターとして数多くの番組で活躍中。著書に「信頼は、つくれる」(ワニブックス・2010年)、「老い駆ける!人生」(KADOKAWA・2015年)等がある。

どんなことでも精魂込めてやれば
道は開ける



視聴者に対する真摯な姿勢が画面越しにも伝わってくるTVキャスターの草野仁さん。世界の歴史を題材としたクイズ番組『世界ふしぎ発見!』では、35年前のスタート時から司会を務め、ヒントをかけた出演者とのやり取りも今ではお楽しみの一つとなっている。NHKのアナウンサーとしてキャリアをスタートさせ、フリーとなつて以降はさまざまな番組で名司会者として活躍している草野さんに、学生時代の話から仕事にかける思い、健康法まで伺った。



TV Caster
HITOSHI
KUSANO

——草野さんというと、誠実で真面目なお人柄という印象が強いのですが、幼い頃はどんなお子さんでいらしたのですか。

父親は長崎大学で数学教授、母親は中学校の音楽教師でした。共働きで鍵っ子でしたから、私は家に帰ったらランドセルを放り込んですぐ小学校のグラウンドに戻り、毎日暗くなるまで友達と野球や相撲を取って遊んでいるような、ただの野生児でした。

——それは意外な子ども時代ですね。

小学校時代、毎日遊ぶことばかり考えていた私は、高校に入っても机に向かって勉強するのが苦手でした。それでも兄二人がストリートで東京大学に入っていたので、自分だけ違う大学へ行くのは嫌だなと思い、勉強もろくにしていないのに受験したところ、案の定、不合格になりました。その時、実力不足というのわかりましたし、落ちたことが悔しかったものですから、父親に1年だけ浪人させてほしいと頼み、東京で浪人生活を始めました。

予備校では勉強をすることが次第に楽し

くなりまして、成績もそこそこ良くなったのですが、受験まで残り半年というところで、はたと自分の間違いに気づきまして。

何かと言いますと、勉強部屋の真ん中に大きなラジオを置いて、ナイター中継やヒット曲を聞きながら勉強していたんですね。

これではダメだと思い、ラジオを部屋の外に追いやつて机に向かったら、これまでに感じたことがないくらい勉強したことが頭の中にびしつと入ってくるようになったんです。その時「勉強するということは、こういう風にエネルギーを100%かけて集中してやることなんだな」と気がつきまして、その後の頑張りが功を奏したんでしょうか、翌年無事に合格することができました。

集中して勉強することの大切さを

学んだことが、後々いろんな意味で

良い影響を与えました。

浪人生活を通し、集中して勉強することの大切さを学んだことが、後々いろんな意味で良い影響を与えました。もしストリートで合格できていたら、その後の人生はガタガタだったかもしれませんね。

——大学では何を学ばれたのですか。

専攻は「社会学」でした。大学の研究機関である「東京大学新聞研究所」にも入ってマスコミ関係のことを勉強するうちに、社会問題について取材をしたり、正しい情報を伝える仕事に就こうと思うようになり、NHKを志すことにしたんですね。願書には「取材記者」「制作」「経営管理」「アナウンサー」の4職種の希望順を書く欄がありまして、私は当然、取材記者以外は眼中に

なかったのですが、とりあえず2番・制作、3番・経営管理、4番・アナウンサーと書いて提出しました。地方出身の私に標準語で話すアナウンサーが務まるはずがないし、問題外だと思っていましたから。最終面接でも「アナウンサー」として採用されたら、どうするんですか？」と質問されて、「それは無理です」と答えたくらいです。

ところが、採用通知には「アナウンサー」と書いてありました。間違いではないのかと思って電話で問い合わせても間違いはない。採用後の研修で「職種替えは一切認めない。配属された地方局で、それぞれ命ぜられた仕事を全うしてほしい」というお達しがありまして、アナウンサーとして第一歩を踏み出すことになりました。

——初任地は鹿児島だったそうですね。

そうですね。私は報道の仕事をしたいと思っていたものですから、報道部門におけるアナウンサーの役割は何だろうか、先輩たちの仕事ぶりを見ておりました。

その頃、糸川英夫博士による国産ロケットが打ち上げられ、日本で初めて人工衛星を軌道に乗せることに成功しました。ロケットの発射地となった鹿児島で、地元放送局制作の特別番組が組まれることになり、会社には地元アナウンサーが起用されました。その方は理系出身で、自らロケットの軌道計算もできるアナウンサーでした。ところが、番組では自分の知識に一切蓋をして何も知らない形で、東京から来た担当記者

私自身スポーツが好きでしたし、放送もよく見聞きしていましたので、スポーツ分野でやっていくしかないなど。

と専門家が解説していくわけです。せっかくの能力を生かせない先輩アナウンサーの姿を見て、私は心もとなさを感じました。

アナウンサーが担当する分野はいろいろありますが、自ら取材して表現できる分野は基本的にありませんでした。ただ、ラジオの時代からスポーツだけは例外でした。私自身スポーツが好きでしたし、放送もよく見聞きしていたので、スポーツ分野でやっていくしかないなど。スポーツをやりたいですと手を挙げましたら、高校野球大会の地方予選のラジオ中継を任せられ、そこからステップが上がっていききました。

——なるほど。そんな経緯があったんですね。

通常よりも早い3年で、九州の親局である福岡放送局へ転動となりました。赴任して1カ月後に管理職の異動があり、その時、私がこの方こそ目標にすべきと思っていた先輩アナウンサーが転動してこられました。

尊敬する大先輩と一緒に仕事ができると喜んでいましたところ「俺がどうして福岡に来たか知っているか？」と尋ねられました。「わかりません」と答えますと、「実は君を育てるために来たんだよ」とおっしゃったん

ですね。思いも寄らぬ言葉に「もし自身身がこのまま伸び悩めば、尊敬する大先輩の名声を傷つけることになる。これは心して頑張らなければ」と気が引き締まりました。

——福岡放送局では、スポーツキャスターとしてどんな仕事をされたのですか。

特に印象深かったのは福岡国際馬拉ソンの仕事です。世界トップクラスの選手が集うこの大会に、1971年、アメリカからフランク・ショーターという選手がやってきました。彼はもともと5000mや1万mのトラックランナーで、アメリカではトップグループにいましたが、日本ではほとんど無名の選手でした。私はその彼のもとへ取材に行き、話を聞くことにしました。

フランクは最初「自分と世界のトップ選手との間にはグラウンド1周遅れの差がある。これはどう努力しても埋められない」と思ったそうです。でも、せっかくなのでやってきましたので、どうにかして世界一になれる道はないかと一生懸命に模索するんですね。

自分自身のトップスピードに近いペースで42・195kmを走破できないだろうか。そのためには、1万m走のトップスピードか



仕事の醍醐味と面白さに のめりこんでいきました。

「何%落とすとしたペースで走り始めればいいのか? 実験した結果、10%ダウンのスピードでスタートすれば、最後まで大きくペーシングを落とさずに走破できるという結論にたどり着いた。その確信を持って、福岡国際マラソンに出場するのです。その話を聞いて私は驚きました。そんなスピードで本当に走ることができるとどうですか?」

そして立つたスタートライン、彼は宣言

「通りのスピードで走り始めました。すると、その速さに着いていける選手がいなくなりました。中継放送では独走するフランクをテレビカメラがワンショットでとらえる展開となり、そのままゴールインして見事優勝しました。そこから彼はマラソンのトップランナーとなり、オリンピックを含めた大会でいくつもの優勝を果たしていったのです。」

——無名の選手から世界のトップランナー

になる瞬間に立ち会われたのですね。

偉業を達成するための目標を打ち立て、実行して、ある種の革命をもたらしたフランクを始めた皆さんの選手と出会うなかで、スポーツキャスターとしての仕事の醍醐味と面白さにのめりこんでいきました。

——33歳で東京アナウンス室に配属されてからは、看板番組『ニュースセンター9時』のスポーツ担当や情報番組『NHKニュースワイド』の司会に抜擢されたりして、全国の顔になっていかれたのですね。

そうですね。40歳の時にはロサンゼルスオリンピックの総合司会を務めるなどNHKのスポーツキャスターの当時の若年者記録を塗り替えながら仕事をさせてもらううちに、この道を選んで間違いなかったという思いになりました。

——そのように仕事で手ごたえを感じながらも40歳で退職されていますが、退職してやっていける自信はお持ちだったのですか。

妻子を路頭に迷わせる危険性もあり得たので非常に危なっかしい決断だったと思いますが、いろんな経緯の中で退職を考えていた時、民放テレビ局から「よかつたらうちの番組に出ないか」と声を掛けていただきました。その一言で心が動いたわけではありませんが、使ってもらえる感触があったものですから思いきってやめることにしました。

——フリーに転身後は、朝の情報番組のキャスターを務められる一方、『世界ふしぎ発見!』(TBS、毎週土曜夜9時)の司会者

人生の最後の瞬間まで仕事をしていきたいですし、そこに向かってエネルギーを持って取り組んでいるつもりです。

にも抜擢されていますが、エンターテインメントの司会は初めてだったそうですね。

最初にお話を頂いた時は、「スポーツ番組と情報番組しかやったことがないので無理です」とお断りしました。でも、「とりあえず企画書を見るだけでも」と渡されて表紙をめくると「あなたもインディ・ジョーンズになってみたいとは思いませんか?」という魅力的な一言が目飛び込んできたんですね。ページを進めると、例えばピラミッドを対象に取材するだけでもざっと30くらいのが考えられますと書いてあって、面白そうだなと感じました。

プロデューサーも「エンターテインメントの番組にはいろんなタイプの司会者がいるけれど、彼らと同じでなくていいんです。いや、むしろ違うタイプのほうがいい」と言ってくださって、その言葉に背中を押されて、お引き受けることにしました。

最初は司会が硬いなどと言われたりもしましたが、3カ月後には視聴率が2桁に伸び、翌年の10月には放送開始時間も夜10時からゴールデンタイムの9時に繰り上がりました。——そこから36年以上続いているわけです。

ね。これほどの長寿番組になっている要因は何だとお考えですか。

出演者もスタッフも、気持ちを一つにしてチームワークを組んでいることは、大きな力になっているだろうと思います。番組を通じて、視聴者の皆さんに何か一つでも新しい情報を覚えていただけたらという思いを共有しています。チームで同じ方向を目指しているということが大事なのだと思います。——年齢を重ねられて、草野さんご自身の仕事の姿勢に変化はありましたか。

例えば番組の中でABCと3つを紹介しなければいけない時、若い頃はABCすべてに同じ力をかけてやっていたんですけども、経験を積むうちに、今日の話題の中ではBこそ皆さんに集中して見てほしいポイントだということが、自分の感覚の中でわりと正確に感じられるようになってきました。これは経験の所産だと思えますね。——77歳となられた現在も、仕事へのモチベーションは変わらないのですか。

私自身まだまだ体力、精神力が続く限りは仕事を続けていきたいと思っています。人生の最後の瞬間まで仕事をしていきたい

ですし、そこに向かってエネルギーを持って取り組んでいるつもりです。

——健康維持のために、心がけられていることはありますか。

食事の時、まず最初に野菜をたっぷり食べることを鉄則としています。炭水化物から食べ始めると血糖値が急上昇して血管を傷めますから、野菜でじわじわ血糖値を上げ、その後にタンパク質、炭水化物の順番で食べます。炭水化物も必要だけれども、取り過ぎには気をつけていますので、体重コントロールもわりといい形でできております。

——体力面ではいかがですか。

年齢を重ねるにしがたって、筋力を失わないことの重要さは増していきます。そういう意味で、自宅に簡単な器具をそろえまして、腹筋を1日約200回と、15kgのダンベルを手にとって何十回もぐるぐる回していますので、それほど筋力は落ちていないのではないかと思います。ただ、あまり無理してはいけませんから、ブレーキはかけるように意識しています。

——意識しないとやり過ぎるのですか。

筋肉はトレーニングをやればやるだけ付いてくるのが見た目にもわかるので、嬉しくなってやり過ぎてしまう傾向があるかもしれません。

——そんな草野さんのお父様は、102歳まで生きられたそうですね。

シベリア抑留で3年間の強制労働をしたにもかかわらず102歳まで生きましたの



で、とても強い生命力を持っていたのだと思います。長崎大学で教鞭を執るようになり少し余裕が出てきてからは、剣道部の顧問を務めながら自分自身も実践復帰して六段、七段と段位を上げ、80歳を過ぎても竹刀を振り続けていました。

——定年退職されてから100歳までは、どのようにお過ごしだったのでしょうか。

出版社からの依頼で受験雑誌向けの数学

の問題をせつせと作ったり、地元の高校生に数学を教えたり、退職後も仕事は長くやっていますね。

——そのお父様に高校2年の時、陸上部をやめさせられたとか。100mを11秒前半で走れるほどの実力があつたのに、勝手に退部届を出されたと。「あの時もし続けていたら、もっと上を目指せたかもしれない」という思いはなかつたのですか。

こうやって仕事を続けることができたのも、父親に陸上部をやめなさいと説得されたあの日に始まっています。「スポーツ選手としての人生は短いんだぞ。30歳を過ぎたら第一線から退き、そこから先の人生は長いんだぞ。お前みたいにくるくに勉強もしないやつが、どんな人間になると思っているんだ」と。

陸上で挑戦してみたいという気持ちはしばらく引きずっていましたが、今になって思うと、父親は長い人生を生きていく上で、一番後悔の念が少ない道を選べということを言ってくれたんだなと感謝しています。

——最後に、草野さんが人生で一番大切にされていることを教えてください。

「やらなければならぬことがあつたら、全神経を集中して一生懸命やる」ということです。失敗してもいいから、悔いを残さ

ないように一生懸命やるというのが一番大切なことだと思っんですね。

20代の頃、私に回ってくるアナウンサーとしての仕事はフィールドホッケーなど認知度が低いスポーツが中心でした。もつと視聴率が高いスポーツを担当したいと思いましたが、よく考えてみれば認知度が低いスポーツの選手にとって放送される機会は滅多にありません。それを楽しみにしてくださっている方がいるのだから、最高の取材をしなければならぬと気がつきました。

どんな仕事でも100%全力を集中してやる習慣をつけて初めて大きなものに立ち向かえるエネルギーや集中力を養うことができます。その気持ちは何にでも必要ではないかと思えます。

——今後やりたいことは何ですか。

スポーツキャスターだった時代、私は偉業を成し遂げたたくさんのスポーツ選手に取材をし、話を聞いてきました。若い頃に取材した彼らがその後どのような人生を送ったのか、インタビューしてみたいですね。

——それはすぐく面白そうですね、気になります。ぜひ実現させてほしいです！ 本日はお話しいただき、ありがとうございました。

(インタビュー／ライター 更田沙良)

やらなければならぬことがあつたら、
全神経を集中して一生懸命やる。